



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	LGBT+相互の連帯と分断
Author(s)	鈴木, 賢
Description	公開シンポジウム「『LGBT』はどうつながってきたのか?」. 2018年10月8日. 北海道大学文系共同講義棟 (軍艦講堂) 2階8番教室, 札幌市.
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74607
Type	conference paper
File Information	LGBT2018-4_suzuki.pdf



LGBT+相互の連帯と分断

鈴木 賢

明治大学法学部教授、北海道大学名誉教授

私はかつてこの教室で授業を受けていた学生でしたけれども、久しぶりにこの教室に戻ってまいりました。今日は「LGBT+相互の連帯と分断」という話をさせていただきます。

私は、札幌で長い間当事者運動をしてまいりました、いわゆる「オープンリーゲイ」のはしりです。2013年まで16回パレードを行いました。昨年、若い学生の方々が復活させてくれて、今年はまた、昨日開催することができました。昨日のパレードは昔の雰囲気を出させてくれて、ちょっと懐かしい感じがしました。こういう運動をずっと札幌でやってまいりました。昨日はSTVのアナウンサーの方がパレード会場のステージに登壇されていましたが、STVラジオの番組に対する抗議活動などもしました。

これは、最初のパレードのときの毎日新聞の報道です¹。1996年のことですから、22年前になります。私としては、22年もこんなことをやっているにもかかわらず、この程度の成果しかないのかと思うこともあり、「あーあ」という感じはややあります（笑）。それでも札幌では「パートナーシップ制度」ができましたから、ほかの日本のまちに比べれば、かなりましなわけです。世の中を変えるのは、容易ではないのです。

1995年には、STVラジオへの抗議活動というのをやりました。STVの社屋の前に行って、メガホンで抗議をし、朝、社員の方にビラを配ったりしました。最後は番組で謝罪をさせるというところまでいきましたが、けっこう骨が折れました。

札幌での活動には、地方にもセクシュアル・マイノリティの居場所——すなわち、自分たちの居場所、当事者の居場所——を作るという目的がありました。当時はLGBTという言葉はありませんでしたので、ほぼ同性愛者を対象にしていました。その後、だんだんとトランスの人が加わるようになりました。もう一つは「可視化を図る」ということですが、その一環で、パレードが札幌で行われるようになりました。

これが、われわれの世代での「ファイナル」となった2013年のパレードのときのインタビューの記事です²。やはり毎日新聞です。

最近、私は東京に居所を移しました。もう研究教育の一線から退いて、セミリタイア生活を送ろうと思って東京へ行ったのですが、色々なことに巻き込まれています。最近パートナーシップ制を全国に広げる運動をやっています。札幌では2017年6月から始まりました。この制度に関して、およそ1年後、一通の投書が北海道新聞に載りました³。投書の主は68歳の女性で、この方のお子さんがパートナーシップ制度を使い、そのおかげで子どもさんのことをほかの人にも話せるようになった、というものです。私はその投書を見て、大変うれしく思いました。つまり、制度ができたことで、それを使った者の周りに

1 「同性愛者たちが、反差別パレード——札幌で30日」『毎日新聞』北海道版 1996年6月19日夕刊。

2 「性的少数者 理解訴え18年」『毎日新聞』北海道版 2013年9月15日朝刊。

3 「LGBTを認める世の中に」『北海道新聞』2018年8月25日朝刊。

いる人の考えを変えていくことが分かったからです。

ほかのまちでもこの道新の記事をよく使います。「パートナーシップ制をやってください」と全国の自治体をお願いをするのですが、よく返ってくるのは「いや、うちのまちではまだ理解が十分ではないので、制度を導入することはできません」という言葉です。しかしそれは物事の順序が逆であって、理解がないからこそ、制度を始めるべきであると思うのです。制度ができれば理解は広がります。理解がないと思っているのだったら、制度を始めない限り理解は進まないわけで、「もしやらないとすれば、理解がない状態を放置することになりますよ」ということを申し上げています。



鈴木賢氏

それから、今年は相続法が改正になりました。私は衆議院の法務委員会で参考人として意見を述べる機会をいただきました⁴。同性愛者の立場から、同性家族にも特別寄与料の請求権を与えてほしいという意見を陳述したわけですが、この点にしまって30分意見を述べました。私が30分しゃべって、その後の質疑も、ほとんど同性家族のことばかりでした。法律にはまだありませんけれども、国会でも、「同性家族」とか「同性婚」という言葉がようやく交わされる段階になったと思っています。

今日の本題は「分断される世界、そして当事者」ということですが、最近起きていることを見て、分断の深刻さというのを改めて思い知らされています。これはLGBTだけではなく、日本だけではないのかもしれませんが。世界中に分断が広がっているのだと思うのです。分断の両端でほとんど対話が成立しないぐらい、亀裂が深い、という思いがします。例えば、先日来話題になっている杉田水脈議員、あるいは小川榮太郎氏の文章をめぐる動きを見ても、あの二人の文章を擁護する人がいる!ということには、さすがにびっくりしました⁵。つまり、「そんな人もいるのだ」「そこまで意見が違うのか」ということです。AbemaTVというネットテレビ番組に引っ張り出されて、私も小川榮太郎という人と議論しましたけれども、その映像を見て、ツイッターで私をののしる声がたくさんあるのです⁶。これまたとてもびっくりしました。あの小川榮太郎氏のほうが説得力があると思う人がいるというのは、「うわあ、これはちょっときついな」という感じがしました。にもかかわらず、何とか世の中を変えたいと、私は思っているわけです。今回の騒動の中で、とりわけLGBTのコミュニティの中にも、小川榮太郎氏や杉田議員に理解を示すかのような発言が出てきます。有名な事例では、元参議院議員の松浦大悟という人です。この人の書いている文章のタイトルがまたひどくて、「特権ではなく『フェアな社会』を求む」となっています⁷。特権なんかだれが求めているのでしょうか。どうしてこういう言葉を使わなければいけないのか、私には全く理解できないけれども、こんな人までいるわけです。

日本のゲイリブ(gay liberation)の歴史は、実は足の引っ張り合いとけんかの歴史でもあります。その中で人も死んでいます。東京のパレードでは、実行委員長をやった人が自死しています。それが一つの理由となって、東京ではしばらくパレードが中断したという歴史があります。そのぐらい、当事者の中

4 2018年6月12日。

5 杉田水脈「『LGBT』支援の度が過ぎる」『新潮45』37(8)(2018-08)、57-60。小川榮太郎「政治は『生きづらさ』という主観を救えない」『新潮45』37(10)(2018-10)、84-89。

6 2018年9月19日放送。

7 『新潮45』37(10)(2018-10)、90-96。

での内部の闘争といいますか、対立にはすさまじいものがあったわけです。それで、今日、こういうことがまた起きているということです。

杉田水脈議員は、LGBとTを分断させようとしています。すなわち、Tの人には支援が必要、けれどもLGBには要らない、というのが彼女の議論です。最近よくTを引き離そうとする言説がありますけれども、私は、LGBT+IQも含めて、何とか一つの固まりを作りたいと願っている者です。当事者の中の分裂という点では、「ジャックの談話室」という人（2018年12月死去）のツイッターが有名です⁸。例えば、「パートナーシップ制なんか、当事者は望んでいない」とこの人は言うわけです。また、保守系の政治家と話をする、「自分はゲイの知り合いがいる、レズビアンを知り合いがいるけれども、彼ら（彼女たち）はパートナーシップ制なんか望んでいない」と、「自分の友達」をよく引き合いに出す議論を聞きます。しかし、異性愛の方でも、婚姻しない人は当然いるわけです。そのことは、婚姻制度が要らないという理由には全然ならないわけです。私は当該対象集団の中で使わない人がいるということは、制度が要らないという理由にはならないと思うけれども、そうした論理が使われています。

そもそもLGBTの困難はどこから来るのか。私は困難というのは人為的に作られたものだと思っています。つまり、LGBTであること自体による苦悩というのは、Tの方々には確かにあるのです。身体と性自認が一致しないというのは、社会という以前に、自分の中に抱えた問題としてあると思います。しかし、それ以外については、社会的に作られた困難です。それは何かというと、社会によって「自己決定権が否定される」ということです。国や社会、家族や他人によって、人生に干渉される。自分が生きたいように生きさせてもらえない、ということなのです。

これには二つの問題の系列があって、一つは「ジェンダー系列の不自由」の問題です。最近は制服が問題になっていて、女性、男性とも着たい制服が着られない、というわけです。どうして着たい制服を着させないのかということ。

そしてもう一つは、「親密圏の不自由」の問題です。つまり、パートナー、恋人、恋愛などを自分の思いどおりにできず、生きたいように生きることを社会が阻害するという問題にぶち当たっているということです。そこには、権利・義務の問題と人間の尊厳の問題の両方があると思います。権利・義務の問題というのは、不便を被るとか損をするという問題です。経済的に損をする。例えば、税金の控除が認められない、遺族年金がもらえない、相続権がない、といったことで、金銭的に損するという話です。しかし、これは同時に生命にもかかわる問題です。もう一つは、社会から「尊重されていない」という心理です。これがもたらす心の問題、すなわち尊厳問題です。両方とも命にかかわる重大な問題だと思います。ですから、そんなに軽い問題ではありません。

かつては女性も、女であることを理由に自己決定を否定されてきた時代が長い間、続いてきたわけです。あなたは女だからだめだ、というわけです。ところがLGBTは、今もそれが続いています。「あなたは同性愛者だから結婚できない」というふうに社会に決められているのです。「命にかかわる問題」だと言いましたけれども、最近、杉田水脈議員の発言をきっかけに、何人かの著名な方がカムアウトされました。そのうちのお一人が、ロバート・キャンベルさんです。この方が言っていることは、私にはすごくぴたりとききます⁹。当事者の中でも「セクシュアル・オリエンテーションなんて、それほど重要な問題ではないじゃない？ そんなことにどうしてこだわって活動するの？」と言う人は昔からいました。

8 <https://twitter.com/jack4africa>

9 ロバートキャンベル BLOG「「ここにいる」を言う意味」2018年9月25日 (https://robertcampbell.jp/blog_top/)。

それはそうなのかもしれないのですが、やはり「自分を形作っている芯」——とキャンベルさんは言っているのですが、とてもぴたりきます。すなわち自分の一生を振り返って、大学の教師になって、こういう研究をして、ああやってこうやって……と、その全部がセクシュアリティと関係していると感じるのです。それは深いところで人生のすべてとつながっていると思います。そういう意味で、セクシュアリティの問題は、自分の人格にとって非常に重要な部分だと感じています。

日本ではなぜこれまで、この問題が公共空間で語られなかったのかというと、それは「いない」ことにされてきたからです。LGBTの問題については、私はTの方も含めて、あるいはQやXやIの方も含めて、一緒に闘いたいと思っています。その共通基盤はあると思います。それは何かというと、「構造的なスティグマ」と闘っているという意味で、共通しているということです。東大のお医者さんで、自身が障がい者で当事者研究をされている熊谷晋一郎という人の、最近ネット上にも出ているインタビューは、私はすごくいいと思っています¹⁰。彼が言うには、『「スティグマ」とは、特定の属性を割り当てられた人の価値を貶めるような認識や態度、言動が蔓延する社会現象』であり、「私的要因に還元できない法律や政策といった国や社会の構造に埋め込まれているもの」を「構造的スティグマ」ということです。つまり、LGBTはまさに人為的に作られた構造的スティグマによって生きづらさを抱えているということになると思います。そして、スティグマというのは健康や命をも脅かしかねず、「社会的に孤立させ、困ったときに周囲に助けを求めることを妨げ、場合によっては住居や仕事、学業などの機会を奪い、自尊心や自己肯定感、心身の健康を損なうことにもつながる」ということです。

さらに、「差別」とは何か、ということを明確に記述している同志社大学の岡野八代先生も、最近、自身がレズビアンだということをカムアウトされました。彼女が紹介している本によると、「差別とはまず、すべての人が同等な価値、すなわち尊厳を持つという大原則に反する行為である」「他者を不完全な人間として、または同等の道徳的価値をもたない者として扱うこと」「権力を背景に他者の価値を貶めること」「差別の悪質性は、差別する者の意図とは関係なく、文脈で客観的に決まる」と述べておられます¹¹。つまりは、すべての人間には同等の道徳的価値が備わっているという理念が揺らいでいるのではないのか。それを疑ってもいいのではないのかと思い始めている人がいる——と岡野先生が危惧しておられるのです¹²。先生が抱えている危機感を、私もまったく共有しています。杉田水脈議員や小川榮太郎氏が書いていることは、まさにLGBTを価値的に低い者と見ることを肯定する議論です。やまゆり園での障がい者大量虐殺事件にも表れているように、特定の属性を持つ人間を低く見て、差別してもいいのだ、と思い始めている日本人が、一定の広がりを見せているのではないかと、非常に恐れるわけです。

他方で、小川榮太郎氏そして杉田水脈議員が展開する「日本はそもそもLGBTに対して寛容な社会であった」という議論があります。この議論は自民党の政策文書の中にも出てきます¹³。西欧にはソドミー法があって、刑罰を科して同性愛者を抑圧してきたが、それに対して日本はそうではなかったという話です。私はこのストーリーは嘘だと思っています。この言説は非常に悪質で、自民党は日本には「構造的スティグマがない」ということを言いたいのだと思います。ないとすればそれをなくす必要もありませんから、

10 「杉田水脈議員の言葉がもつ差別的効果 熊谷晋一郎氏インタビュー (1)」(<https://www.buzzfeed.com/jp/naokoiwanaga/kumagaya-sugitamio-1>)。

11 デボラ・ヘルマン(池田喬、堀田義太郎訳)『差別はいつ悪質になるのか』法政大学出版局、2018。

12 岡野八代「差別発言と、政治的文脈の重要性」『世界』913(2018-10)、140-149。

13 自由民主党「性的指向・性自認の多様なあり方を受容する社会を目指すためのわが党の基本的な考え方」(平成28年5月24日)。

法律の制定は必要ない、ということになります。当然ですけれども、構造的スティグマは、色んな形態をとるということです。日本の構造的スティグマは、西洋とはタイプが違います。しかし、それがないということではありません。やはり、社会が構造的にLGBTを排除し、差別してきたという点では、変わりがないと思います。

色んな運動を進めていくと、松浦大悟さんが言っているとおり、当事者すら「特権を求めるのか」という非難を口にする者がいます。驚くばかりですけれども、当然そういうことではありません。要するに求めているのは、社会的に「いない」ことにされてきたのを、「いる」ことにしてくれということなのです。これまでは、異性愛者とシスジェンダーの人しかいないというのが前提で、さまざまな制度は成り立ってきました。しかし、その中で同性愛者、LGBTがいるのだということを示すためには、それを法文で明示しなければいけません。ですから、特別扱いしているかのように見えるかもしれませんが、今まで奪われてきたものを、単に取り戻そうとしているだけなのです。そんなことも理解できないというのは、それこそ理解できないのですけれども、そういう言説がよく流通しています。

お茶の水女子大学のトランス女性を受け入れるという最近の発表は、大変いいニュースだと思いました¹⁴。これも自己決定権を取り戻す、一つの措置だと思います。女子大というのは、だれが「女子」かということ定義する必要があります。これまでは戸籍によってそれを定義してきました。ところが、性自認も一つの基準とするというわけですから、ルールを変えるということです。「女性」の定義を変える。つまり、何が女性かを自分で決めていい、と言い出したということです。これは自己決定を認めるということですから、非常に大きいことだと思います。これによって、お茶の水女子大学に実際にトランスの方が入学するかどうかということよりも、大学として自己決定権を認めるという方向に舵を切ったということは、すごく大きな出来事でした。ほかに波及する可能性があると思います。

それから、これも保守派の人から時々言われますし、ネット上では「『LGBTは気持ち悪い』あるいは『嫌い』」ということや、どうして言っはいけないのだ。それを言うのも自由だし、それを言えないのは多様性を認めていないことになるのではないのか」という意見をよく見ます。しかしながら、多様性を否定する言説を許すことは、多様性の基盤自体を切り崩すことになると思います。ですから、それはやはり許されないと考えています。言論の自由についても今、同じようなことが言われています。

『新潮 45』が休刊になったのを見て、強い批判を行うことを「言論弾圧である」とする意見があります。あるいは、つい先日採択された東京の条例で「LGBTに対する差別を禁止する」とされたことも言論弾圧になる、という議論がありますが、私はそうではないと思います¹⁵。この大学の同僚だった山口二郎さんが「人間の尊厳を否定する極論を色んな意見があると許容することは、結局、社会を破壊し、自由を崩壊させる」と言っていますが、まさにそのとおりだと思います¹⁶。ですから、どんな言説でも許されるものではないということです。言論の自由自体を壊すような言説は、やはり認められない、ということになります。

それから、杉田議員や小川氏は言論の自由を行使して、あるいは享受して、卑劣なヘイトをまき散らしたわけです。ですから、それに対しては、言論市場において批判を浴びるのは当然です。ですから、そ

14 「トランスジェンダー学生を受入れについて」2018年7月10日 (<http://www.ao.ocha.ac.jp/menu/001/040/d006117.html>)。

15 「東京都オリンピック憲章にうたわれる人権尊重の理念の実現を目指す条例」(<http://www.soumu.metro.tokyo.jp/10jinken/tobira/pdf/regulations2.pdf>)。

16 「本音のコラム——言論の自由」『東京新聞』2018年9月30日 (<http://yamaguchijiro.com/?eid=1429>)。

れには発言者として矢面に立って責任を持って反論すべきです。強い批判を浴びているのはなぜかという
と、とんでもない発言をしたからです。一連の批判は弾圧でも何でもないので、みそもくそもいっしょ
くたにされていると感じます。

先ほど、日本寛容論に触れました。すなわち、「日本は寛容だから法律は必要ない」「せめて『理解増
進法』だけでいいのだ」というのが自民党の結論です。そして、このことは小川榮太郎氏の文章にもよ
く出てきますけれども、要するにこの議論はLGBTを再び、私的でプライベートな問題にしておきたいと
いうことです。小川氏は「人間ならパンツは穿いておけよ」と言っています。つまり彼は、「ゲイです」「レ
ズビアンです」とカムアウトすることをこう表現しているわけですが、要するに「それは私的な問
題だから、公共空間で語るな」と言いたいわけです。これは構造的スティグマを放置せよとする議論です。
構造的スティグマをそのままにしておけ、と彼らは主張しているということになります。これは不可視化を
そのままにして、法主体性を剥奪し続けようとする陰謀だと、私は思っています。「カムアウトする必要の
ない社会」ということは結局、異性愛やシスジェンダーを当然視する社会だということです。それを続け
るということになります。ですから、こういう議論には正面から反論をしなければいけない、と私は思い
始めています。

AbemaTVに出てから、いくつかメールを頂きました。全然知らない人からです。賛否両論あるのです
が、ここでは恣意的に、賛同してくださった人のメールを紹介します。

「自分はここ数年で気づいた多分バイセクシュアルで、過去に強制送還されたことがある外国人の同性
がパートナーです。感動しました。あんな差別主義者の隣に座らされ、感情的になるであろうに、一生
懸命感情を抑えて討論しようとしている鈴木先生の姿を見て、泣きながら昨日、吐くまでお酒を飲んでし
まいました。」

この方のパートナーは韓国人の方ようで、強制送還になったので、しばらく日本に来られないのです。
このように在留資格問題に悩まされている国際同性カップルはたくさんおられます。

それから、別の方ですが、その方の弟さんがゲイだと書いています。そのお母さんが「杉田さんの記事
を読んで、声を震わせて泣いていました」とメールをくれました。

このことがきっかけで2018年7月27日の夜の抗議行動が起きました。私はこれは日本の「ストーン
ウォール」反乱の日ではなかったかと思っています。当事者がようやく立ち上がったのです。私も行きま
したけれども、自民党本部の前に約5,000人が集まり、抗議の声を上げました。一向に議論の矢面には
出てこようともしませんけれども、自民党は杉田議員をかくまっているわけです。

札幌でもこの写真にあるように派手な抗議活動をやりました。

この杉田問題がすごく深刻だと思っているのは、この背後には安倍晋三という人物がいることです。杉
田議員も小川氏も、安倍晋三と非常に距離が近いところにいる。だから、彼らはああいうことを正々堂々
と言えるのだと思います。つまりたまたまヘンな発言が出てきたことではないということです。もっと構造
的で、深い問題です。しかも政権の中核と結びついている。ですから、私は、この問題をこれで終わり
にしてはだめだと思っています。

それから、私は最近の当事者陣営内部の分断にとっても心を痛めていますけれども、これについて、熊
谷さんが次のような面白いことをおっしゃっています¹⁷。

17 「『生産性』とは何か? 杉田議員の語ることと、障害者運動の求めてきたこと 熊谷晋一郎氏インタビュー(2)」(<https://www.buzzfeed.com/jp/naokoiwanaga/kumagaya-sugitamio-2>)。

「当事者の中にはナルシストとアクティビストがいる」

これは身障者運動の中から彼が言っていることです。

「ナルシストというのは自分の存在に対する他者からの承認を得たいがために、他者から賞賛されるであろう自己イメージ（理想像を投影した仮面）に、過剰なのめり込みをしている人びと」

「『等身大の自分では生きていけないのだ』と学習してきた結果、そうなってしまっている」

確かに、ツイッターなどで杉田議員や小川氏に賛同している人たちの言葉を見ると、これがびったり当てはまります。構造的スティグマの中でそれに従って生きること、より楽な人生を生きることを選択している人がある、ということです。他方で、私もそうですけれども、構造的スティグマをなくすために闘おうとしている人があるのです。

これまでお話ししたとおり、LGBT 運動の目指すものは、異性愛、シスジェンダーを自明とし、それを自然とする構造を打破することです。ですからやはり、カムアウトというのは大事です。カムアウトする人がいない限り、異性愛でありシスジェンダーであるということが自明とされてしまいます。

私たちが求めているのは、選択肢の確保であり、それへの平等なアクセスであって、選択の強制ではありません。つまり、婚姻制度を求めるのも、一人一人が全員婚姻するという意味ではありません。婚姻をするかどうかも含めて、それは当事者の選択にゆだねられていることです。しかし、そもそも選択肢が与えられていない。その不平等・差別をやめて欲しい——ということです。ですから、トランスの人にも、同性愛の人にも共通するのは、性的な自己決定を奪われており、それを取り戻す闘いをしているということです。そういう人間の尊厳の回復運動をしているのだと考えております。

昨年、『世界』という雑誌に論文を書きました¹⁸。これから登壇される清水さんの論文を見て、ちょっと危機感を覚えたことがきっかけでした¹⁹。清水さんはいわゆるニュー・ホモノーマティビティ的な潮流に対して批判的な言辞を書かれていたからです。森山至貴さんという人の本によると、「ニュー・ホモノーマティビティ」—— 難しい言葉なので、日本語にしてもらいたところですが——とは、よき消費者として市場で存在感を示すことで体制に認められようとする同性愛者のあり方、を言うのだそうです²⁰。具体的に言うと、一部の経済的に恵まれたエリートゲイです。確かに、こういう潮流が日本でも目立つのはそのとおりです。私は個人的にはこのグループの人たちとはあまり親しくはしていません。はっきり言って、あまり好きではないし、「距離を保っている」と言ったほうが正しいのですが、私はあえて批判もしません。それから、一緒にやれるときは一緒にやります。つまり、もちろん賛同はしないけれども、利用できるものは利用しないと、運動は前に進めないということです。たとえば、昨年、制定された東京都のLGBT差別禁止条例は、Tokyo2020 が一つのエンジンになっています。2020 年オリンピックがそんなに大事か、と私も思います。思いますけれども、それを口実にすれば、何かことが進むのだったら、それでもいいのではないかと思うのです。それから、LGBT にフレンドリーだというイメージが、大企業にとって金もうけにつながるのだったら、それでもいいじゃないかと思うのです。だから、あまりこれを強く批判しないほしいと私は思いました。それで、『世界』の論文を書いたのです。

今日の結論は、「分断は拒否すべきだ」ということです。つまり、法律を作らなければいけないとすれば、陣営のウイングを広げるしかないのです。ですから、目いっぱいウイングを広げたい。できれば自民

18 鈴木賢「世界の潮 法的権利を獲得してゆく LGBT：札幌、台湾での成功」『世界』897 (2017-07), 34-37。

19 清水晶子「ダイバーシティから権利保障へ：トランプ以降の米国と「LGBT プーム」の日本」『世界』895 (2017-05), 134-143。

20 森山至貴『LGBT を読みとく：クィア・スタディーズ入門（ちくま新書 1242）』筑摩書房、2017。

党の中にも広げたいのですけれども、今のところ非常に難しい。「安倍」的なものがなくなる限り難しいですけれども、清濁併せのむという度量の大きさが必要なのかと思います。人権啓蒙派、尊厳回復派、困難共感派、資本迎合派、国家主義派が大団結するしかないだろうと思います。

去年の東京のパレードの直前に、杉山文野さんが毎日新聞のインタビューに答えていました。「マーケットが人権を作る」と²¹。実は彼はそういう言葉を口に出したわけではないのだけれど、それに近いことを言ったのは確かなのです。それで、記者がこういう見出しをつけてしまったわけです。これには当時、随分批判の声があったのですが、私はこれも一つの真実だろうと思います。はっきり言って、日本は資本主義社会です。企業にとって収益を上げることが一番大事なのは当たり前です。企業が変わるということは、社会全体を変える上で、やはり大事なことから、そういう意味で資本派の人たちも大いに利用すべきだろうと思います。

ついていけるところまでは一緒にやって、ついていけなかったら黙って降りるということです。内部で罵らないようにしたい。内部の闘争に過度のエネルギーを消費すべきではないのです。要するにけんかはやめましょうということです。意見が違ふのは当たり前です。違いは違いとして残しつつ、一緒にやれるところまでは一緒にやりましょう。でもやっぱり、それぞれにボトムラインはありますよね。ボトムラインは何かというと、やはり敵を共有しているという認識です。われわれは何と闘っているのかと言えば、構造的なスティグマと闘っているのだということです。それをいかになくしていくか。とにかく色々な方向からアプローチしていくということに尽きるのではないかと思います。

これが、去年の『世界』に書いた文章の結論的なところですよ。

要するに、呉越同舟で協力していきましょう。どうせマイノリティなので、LGBとTは違うなどと言わないで、みんなで一緒にやりましょう。敵をはっきりさせることによって内部を団結させられる、と私は思っております。

私の話は、以上です。ありがとうございました。(拍手)

(近藤)

鈴木先生、ありがとうございました。

次に、清水晶子先生にお話しいただきます。

清水先生は現在、東京大学大学院総合文化研究科の教授で、ご専門はフェミニズム／クィア理論です。雑誌『現代思想』『世界』のLGBT関係特集にも多数の寄稿をなさっているので、先生の論文をお読みになった方も多いのではないかと思います。本日は、主に英語圏世界の運動とアカデミックな議論の動向についてお話しいただくことになっております。

21 「東京レインボープライド『声上げることで変わってきた』」『デジタル毎日』2017年5月3日。